

昭和36年度調査，研究の結果についてその内容を理解し，指導のための資料として活用することを目的として，出張所の指導主事への報告会を行った。

(2) 期 日 5月10日11日の両日

(3) 内容および発表者

① 中学校一せい学力調査結果の考察にあたっての留意点（牧野所員）

② 全国中学校学力調査の誤答分析の結果から見た指導上の問題点

- ・国語（付中，小平教諭）
- ・数学（吉田所員）
- ・理科（保原小，鈴木研修員）
- ・社会（杉田小，金沢研修員）
- ・英語（野田小，神永研修員）

③ 望ましい学習指導法の実証的研究（六角所員）

④ 方程式による応用問題解決のつまづき（河野所員）

(4) 参加者

本庁ならびに出張所の指導主事

2 長期研修

(1) 目 的

当研究所の継続研究としてとりあげた「望ましい学習指導法の組織化」の研究に現職の教員を参加させて，望ましい学習の指導法を体得させ，帰校後その学校および地域における当該指導法の推進者とする。

(2) 研修題目

能力に即した家庭学習とその結果を生かした学習指導法の研究

(3) 研修内容

- ① 英語，社会，理科，数学についての教材の分析
- ② 児童，生徒の認識思考過程の分析
- ③ 教材の論理と思考過程に即した学習指導案の作成
- ④ 実践による検討
- ⑤ 全国学力調査結果の分析

(4) 研修の場所

- ① 教育調査研究所および安達郡安達町立油井小学校
- ② 国立教育研究所

(5) 研究の期間

昭和37年4月1日より昭和38年3月31日までの1ヶ年間

(6) 研修員

- | | | |
|--------|---------|-------|
| ・英語，社会 | 福島二中教諭 | 若林 宏道 |
| ・社会 | 須賀川高校教諭 | 武田 奥一 |
| ・数学，理科 | 桑折釀芳中教諭 | 花沢 繁 |
| ・理科 | 熊倉中教諭 | 野原 信夫 |

3 全国学力調査結果の処理法講習会

全国学力調査の結果を，地教委，学校の立場でどのように活用するかについて，現場からの要望に応じて「処理法講習会」を持った。

37年9月より11月にわたって，県内13ヶ所に2日間の日程で1校1名以上の参加を求めて実施した。（参加人員は約1,500となった。）

内容は，自校の学力調査の結果をどのように処理して県，国と比較すべきか，指導上の反省資料をどのようにして見つけるか等，必要な初歩的教育統計を加え，具体的に集計表から数値を算出する実技を兼ねて行なった。

これにより，個々の学校において，県で配布した資料としての報告書を読みとり，自校の結果を分析する手がかりを見つけてくることの出来るようになった点，大きな効果があったものと思われる。

4 望ましい学習指導法の組織化の研究

(1) 動機・目的

文部省では，昭和31年度以来，全国学力調査を実施し，あわせて，学校が所在する地域の経済的，文化的諸条件が，その学校の学力に影響を与えたるものであるとの仮定に立って付帯調査を行なってきた。

その結果として，都市化の程度と学力は高い相関を持っているが，学校規模や教員構成，図書整備などと学力の相関も高いことから，いろいろな因子が学力に影響を与えているのだということがわかる。

そこで，視点を変えて，昭和34年度に全国学力調査の被検者の家庭生活状況と学力の関連を追求するため，「都市と農山村の学力差の要因を明らかにする」ことを目的にして生活調査を実施した。仮説としては，児童の生活は都市化の程度によって差異が生じ，さらにそれが学力と高い相関をもっているのではないだろうかということであった。

結果については，すでに「全国学力調査に関連させた生活調査の報告書」で述べた通り，学校間の校力差には地域類型よりも，児童の家庭における作業量の差異によるものの方が大きく影響しているということであった。

また，近時，学習指導法の体質改善の線に沿って，児童の認識のすじに合った学習指導法や児童の自己活動を重視する学習指導法の確立が強くさげばれ，学習の個別化やフィードバックの重要性が強調されてきている。

そこで，従来の家庭学習を能力に応じ予習を主とするものに切り換え，この家庭での予習を基礎として，これに学習の個別化とフィードバックの理論をとり入れた学習指導の方法を体制化しようとしたのである。

(2) 分 野

① 教材の論理と生活の論理に即した学習指導計画案